

農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

地域住民と都市住民の協働により地域を守る

受賞者 ^{うちなり} 内成の棚田とむらづくりを考える会
(^{おおいたけん べつぷし} 大分県別府市)

■ 地域の沿革と概要

別府市は、九州の北東部、瀬戸内海に接する大分県の東海岸のほぼ中央部に位置し、^{くにさき} 国東半島と^{さかのせき} 佐賀関半島に挟まれた波静かな別府湾に面する。

市内には別府八湯と呼ばれる8つの温泉エリアが点在し、温泉の湧出量が毎分8万3,000リットルを越え、日本一の湧出量と源泉数を誇っている。別府市は、医療、浴用などの市民生活はもとより、観光、産業などにも温泉が幅広く活用され、古くから日本を代表する温泉地として賑わい、歴史と文化あふれる国際観光温泉文化都市となっている。

平成12年には、留学生が学生の半数近くを占める「立命館アジア太平洋大学」（以下「APU」という。）が開学し、現在は市の人口約12万人のうち約3,000人の留学生が暮らしており、日本でも有数の異文化あふれる国際交流都市としても成長を続けている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

内成地区は、別府市の南端部の標高約130～300mの位置にあり、9つの集落で構成される人口207名の山間農業地帯である。耕地のほとんどが水田で、平安末期から江戸時代にかけて形成された石組みの棚田であり、鎌倉時代の文献にも記録が残っている歴史ある地域である。

古くから水稲を中心とした農業を営んでいるが、田の一枚の平均面積は3a、枚数が約1,300枚と生産条件に恵ま

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	大字単位の集団等
地区の性格	地縁的な集団等
農 家 率 (内訳)	63.4% 総世帯数 93戸 総農家数 59戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 16戸 1種兼業農家 3戸 2種兼業農家 21戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 231ha 耕地面積 28ha 田 27ha 畑 1ha 耕地率 12.1% 農家一戸当たり耕地面積 0.5ha

れず、一戸当たりの経営規模も零細なため、若年層は都市部へ流出しており、耕作放棄による農地の荒廃及び担い手の不足が懸念されている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

内成地区の棚田は、傾斜率が1/15から1/5（約4度から11度）と急な傾斜であるため、ほ場整備等の土地改良事業が実施されておらず、昔ながらの石組みで不整形な水田であった。水路や農道などの整備も遅れ、農業従事者の高齢化と後継者不足により耕作放棄地の発生と棚田の消失が懸念されていた。

こうした中、平成11年7月に「日本の棚田百選」に選ばれたことを契機に、地域の有志等により棚田を守るための組織として、平成13年12月に「内成の棚田とむらづくりを考える会」（以下「考える会」という。）が設立された。

大分県がむらづくりを推進するために実施していた「誇りと活力あるむら1000プロジェクト」を活用した地区住民の話合い活動を経て、地域の問題点や取り組むべき課題を整理した。

また、女性を対象とした農産加工品研修会を実施するとともに、福岡県や大分県の棚田の保全活動を視察することで、棚田を保全していく気運が徐々に醸成され、平成17年度の「中山間地域等直接支払交付金事業」の集落協定により、農業者や地域住民が一体となった棚田保全活動の取組が本格的に行われるようになった。

(2) むらづくりの推進体制

考える会の構成員は49名であり、役員会と3つの専門部会（営農部会、生活環境部会、農産加工部会）で構成されている。毎月1回定例会を開催し、各部会を中心に地域全体での取組を行っている。

ア 内成の棚田とむらづくりを考える会

① 営農部会（12名）

耕作放棄地の野焼き、菜の花やソバの作付け、農家の高齢化により作付けできなくなった水田における水稻の作付け、水路や農道の草刈り、維持管理作業など棚田保全を行うための主要組織である。

② 生活環境部会（11名）

内成観光マップの作成、オンパク（温泉博覧会）棚田観光ツアーの受入れ等都市住民との交流事業、駐車場の整備、案内板の設置等観光客を受け入れて地域活性化を行う取組を計画し、実行している。

③ 農産加工部会（20名）

地区の女性を中心となり、農産物加工品を開発するとともに、都市住民との交流事業の際に昼食や弁当づくりを行っている。

イ 関係団体

① 内成活性化協議会（57名）

中山間地域等直接支払交付金事業の集落協定参加者により構成される組織で、平成17年に発足した。内成活性化協議のメンバーは考える会とほとんど重複していることから、両団体は一体的に活動している。主な活動は、農作業機械の共同購入、農業倉庫の維持管理、水路や農道の補修・改修、農地における畦畔の草刈、農作物の生産である。

② 内成地区自治会・内成自治公民館

両団体は、地区住民と都市住民の交流及び地域活性化を目的とした「内成産業文化祭」を毎年開催している。文化祭においては、考える会と両団体が連携し、APUの学生による棚田保全活動の発表、学生とコラボレーションした菓子の開発・販売などの取組を行っている。

③ 立命館アジア太平洋大学（APU）

ロングステイ（長期滞在型観光）研究を行う畠田研究室を中心に、APUの学生と連携して、ロングステイの拠点施設となる古民家の改修、休耕田を利用した市民農園の開設などを行っている。

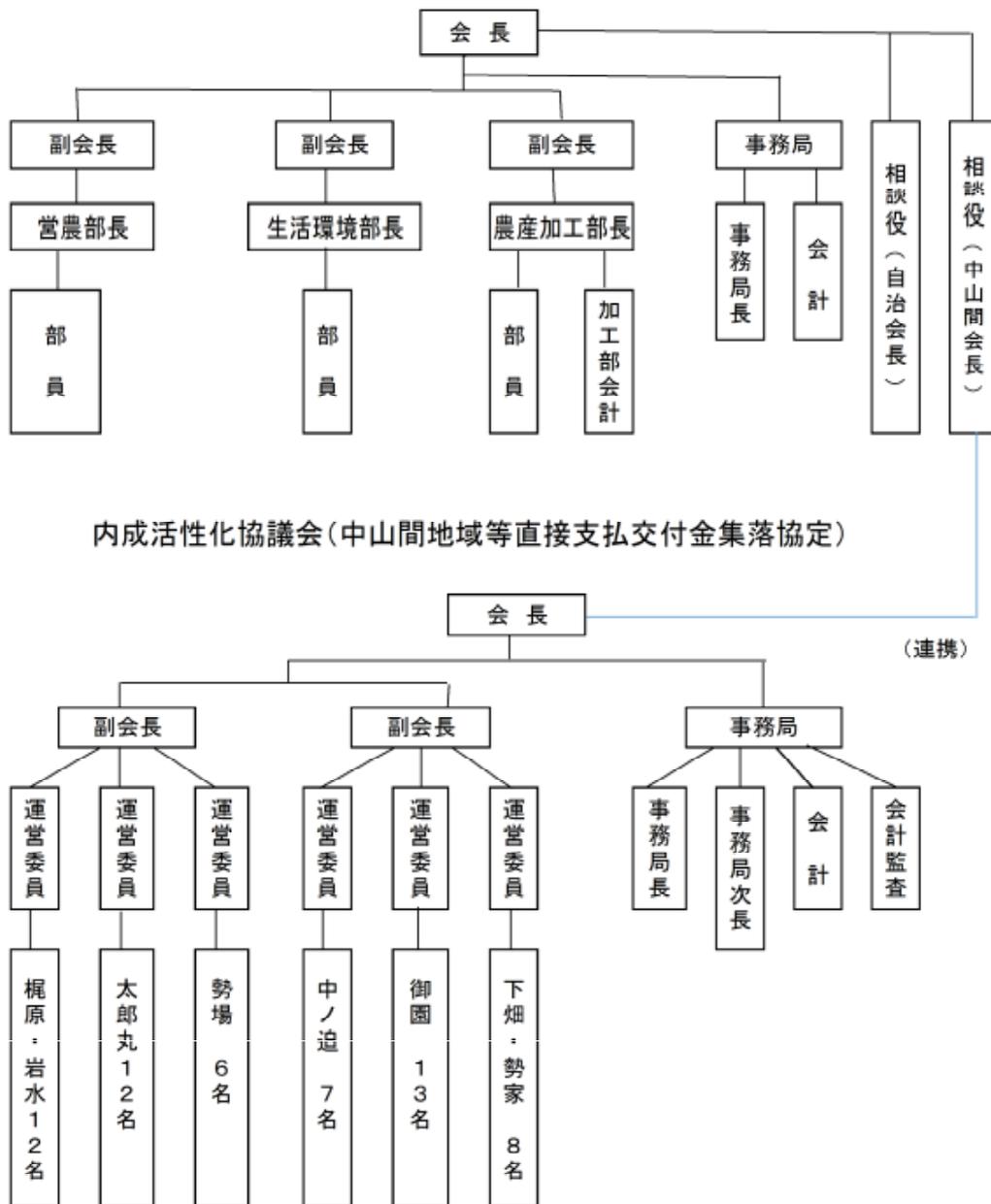


写真1 APUと地域住民の交流

④ その他

内成地区は、別府市街地に近いことから、都市住民との交流を進めており、NPO法人ハットウ・オンパク（別府八湯温泉博覧会）、別府市中央公民館、亀の井バス株式会社など多くの団体や企業と連携している。

第2図 むらづくり推進体制図
内成の棚田とむらづくりを考える会



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

棚田は、農業を生産する場という側面以外に、農村の景観を保全したり文化を伝承したりする多面的機能を発揮する場としての側面を持っている。しかしながら、約1,300枚の極小で不整形な棚田において農業を維持していくことは、大変困難な状況となっている。

そこで、「日本の棚田百選」に選定されたことを契機に設立した「内成の棚田とむらづくりを考える会」が中心となり、休耕田への農作物の作付、農作業機械の共同購入、水路や農道の維持管理などに取り組んでいる。

また、生産条件の悪い棚田を地域資源として活用するため、都市住民やA P Uとの交流を通じて、農作業体験活動や長期滞在の取組、棚田の景観を観光資源としたバス会社とのコラボレーションなど、都市住民の発想と力を活用したむらづくりを行っている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 耕作放棄地の発生防止と景観維持活動

内成地区の棚田は、平均面積3 aの狭小な水田であり、農道や水路も整備されておらず、田越しの機械搬入や取水などで多大な労力を強いられるなど、生産条件に恵まれていない。

しかしながら、地域ぐるみのむらづくり活動が始まったことにより、美しい棚田景観を守っていこうとする気運が高まり、他



写真2 秋の棚田

地区では耕作放棄となっているような条件であっても、可能な限り耕作を続けている。考える会では、内成活性化協議会と連携して中山間地域等直接支払交付金により農作業機械を共同購入し、貸出しを行うことにより、棚田を守ることに繋がっている。

また、高齢化により作付けできなくなった水田や遊休化した農地において、営農部会が水稻の作付けのほか、梅やプラムの植え付け、ソバや菜の花を作付けするとともに、ソバの製粉や菜の花の搾油を行うなど、農産物の加工にも取り組んでいる。これらの取組により、地区の耕作放棄地面積が10年間で1.1ha減少した。

(2) 生産基盤の維持管理や獣害防止の取組

水路や農道の保全管理については、活性化協議会と連携して、溝さらいや草刈を実施している。

また、長年イノシシによる水稻被害に悩まされており、営農意欲の減退や耕作放棄地の発生が心配されたため、平成24年度に集落全体を囲むよう延長約15kmのイノシシ侵入防護柵を地区住民の総参加で設置した。

(3) 棚田オーナー制度の導入と市民農園の開設

農地の保全と併せて、都市住民との交流を促進する目的で、棚田オーナー制度に取り組んでおり、都市住民の力を借りて棚田の保全活動を行っている。

また、A P Uと協力して、休耕田を活用した市民農園を開設し、募集や農園の維持管理についてもA P Uの学生と協同で行っている。



写真3 棚田オーナーによる稲刈り

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 棚田景観維持・向上の取組

水路沿いや畦畔に彼岸花や菜の花などの景観作物を植栽しており、春や秋の棚田を彩る風物詩として、地域住民や棚田観光に訪れる観光客の目を楽しませている。

(2) 都市住民との交流の取組

棚田観光に訪れる観光客の利便性向上のため、棚田の観光マップやパンフレットを作成して配布しているほか、案内看板の設置や野外トイレ、ベンチ、駐車場等の整備を行っている。

また、春と秋に別府市全体で開催している「別府八湯温泉博覧会」と連携した棚田散策・棚田めぐりツアーの開催、A P Uの学生と連携した「棚田サッカー大会」の開催など、地域住民と都市住民交流のイベントを行っている。

さらに、ヨーロッパのような長期滞在型の観光を目指し、A P Uの畠田研究室と連携して内成地区内にある築約100年の古民家を改修し、ロングステイの拠点施設として「ホリデーハウス御園」を設置した。この建物や庭、畑の管理は地元農家が行い、インターネットを利用した募集についてはA P Uの学生が行うなど、運営管理を地域住民とA P Uが連携して行っている。



写真4 古民家を利用した長期滞在施設

(3) 農業体験学習の開催

農業の大切さと内成地区の棚田の美しさを都市住民に伝えることを目的に、親子で田植えや稲刈りなどの農業体験学習を別府市内の中央公民館と連携して毎年実施している。参加者の募集は公民館が行い、農地の提供と農作業の指導は地元農業者が行っている。

(4) 棚田を観光資源として活用

平成26年度から、亀の井バス株式会社と連携し、路線バスの旅（内成散策3コース）の紹介、福岡市と別府市を結ぶ高速バス「内成棚田ラッピングバス」の運行など、棚田を観光資源として活用する新たな取組を開始している。